

複雑に考案された作品（計六点）により、日本人、水木壘は観者に対話式経験を提供する。その裏に隠れた単純明快なコンセプトは、時間的視点—過去と現在—に中心的役割を与える。同じフォーマットの四点に《*Instability #Cologne1-4*》と名付け、不安を起こさせるもの（安定性の欠如、変化する構成物の配列、移ろいやすさ、予測不可能な変化）と豊かにするもの（変化による獲得、新しいものによる認識発達、多様性、複雑性）を描く。

安定性というものは、僧侶であり歌人である松尾芭蕉（1644-1694）に追従すること、即ち「不易」の探究によってのみ見出せる。水木は「*Bilderbuch Köln*」の協力を得て、姉妹都市提携締結年のケルンのアーカイヴ写真をインターネット上で予め目を通して選択し、ケルン滞在と作品制作の土台とした。写真に写された正にその場所を探し出し、当時の写真家が立っていた場所と全く同じ位置から撮影し、全く同じ視界を捉える。新たに撮られた写真とそれに精確に重ねられたアーカイヴ写真のモンタージュは被写体の直接的な比較を可能にする。ここでは住民でさえ日常では気付かない五十年という年月の経過による都市の変化をも明確にする。

「*flowing Urbanity*」の為の水木のコンセプトは、過去作品から続くアイデアとは異なったものだ。二つの対応する写真、見開きページのように隣合わせに置かれた二枚は、片方を上に壁面に掲げられ、まるで鏡に映されたものの如く水面の映り込みの効果を与える。《*Instability #Cologne 1-4*》においては、分離した連続の中の象徴的な映り込みを問題とはしない。三つ目の層はガラスに張られたごく薄い、半透明且つ半反射する日焼け防止フィルムが作る。フィルムは探し出された場所の中に二元モンタージュの一部を覆い隠す。半透明の層と重畳のおかげでこれらの作品は揺れる水面の反映をも想起させる。複合的全構造は展示室の観者に、自身の幻のような鏡像が、皮膜のような間仕切りの上で半透明の地や室内にいる他の観者と混ざり合う様を見せる。

そもそも写真とは、映画のような動画とは対照的に、ひとつの時点を保存するものだ。にもかかわらず、本来静的な水木のフォト・モンタージュはこのフィルムにより、一人あるいは複数の観者が作品に近づき、離れたり動いたりすることで忽ち変化する。不安定性とはつまり、それ自体によっては存在し得ず、相互依存的関係性によって存在し得る。蜃気楼の如く、ガラス表面の映り込みが組み合わさるように押し込まれる。写真は俳優が出入りする舞台と化し、彼らはあらゆる瞬間において新しく生まれる状況に対応し、空間の自己や他は過去と現在の都市風景という背景に映り込んだものとして体感される。境界線を引き停止するよう、モンタージュの嵌め込まれた額縁が促す。額縁は境界線内にあるもの全てに向けられたまなざしを曲げ、貼り合わされた層に底面を与える。額縁はまるで移ろい行く歴史への入口のようである。

モンタージュ《*Instability #Cologne 1*》では選択された主要モチーフ自体が過去と現在を結びつける。建築家ピーター・ズントーのセンセーショナルな 2007 年の作品は新しい都市建築に重点を置き、聖コルンバ教会の廃墟並びにゴットフリード・ベームの《瓦礫の中の聖母》の為に建設された戦後聖堂を一体化

させる。この歴史的な写真では、ケルン大聖堂の二本の支配的な塔が姿を見せている。そして見ることのできない内側をも。このケルン大司教管区美術館は古代末期から現代までの作品を対話形式で展示する。観覧時に訪問者は幅広の巨大ガラス板の時間網の広がりへと移動し、超現実的な気分させる場面と結びついたことを知る。

《Instability #Cologne 2》は細長い鏡面を持ち、近景と遠景、左側の現代（グラフィティのある建物の正面、籠の付いた自転車のハンドル）と右側のアーカイヴ写真の過去（1963年、ジョン・F・ケネディの到着を待つ、背景の燦々たる深さへと通じる大衆の行列）の間に時間旅行をしている観者が位置づけられている。この行列はさらに列をなす。鏡像とフォイルの前に立つ実際の展示観覧者は行列の後ろに続き、過去の出来事は現在の空間、今ここへ、そして観者は過去へと移動する。

コロニア・ハウス（1973年から1976年まで旧西ドイツの建造物）、MS「ライン・トロイエ」（最古の発動機船、それに乗り「ライン川を体験」し、さらに結婚式もできる）、ロープ・ウェイ（1957年から2011年までドイツ唯一の川を渡るロープ・ウェイ）、ツォーブリュッケ、そして滅多に見られないライン川の浮氷により《Instability #Cologne 3》のモチーフはケルン史最上の核心を捉える。ロープ・ウェイ（アーカイヴ写真当時は建設中）、高層ビル、船舶の下で、モンタージュの前に立つ観者は「頭」を失い、下半身は「川岸」に残る。観者はその存在により、決して都市風景の影を薄くさせない。つまり、この半反射するガラスは魔法の如く時空のゆがむ水木作品の下部全てを覆う。

シリーズ唯一の彩色フォト・モンタージュ《Instability#Cologne 4》は縦長長方形のフォイルにより、観者をケルン・ミュールハイムのちょうど玄関前に現れさせる。都市化の古今の景観はただ、写真左に写る若い女性の靴、現代的な車、そしてノスタルジーを生み出すアーカイヴ写真のセピア色によってのみ認識できる。必要最低限に減られ、並べられた姉妹都市提携締結時の建物正面窓の正方形の反復と連続性は、ケルンの移民化の始まりに相応しい美学を表現する。

水木壘は観者を、水木とともにカメラ・レンズの向こうに入るように誘導する。彼のシリーズは作品の前に立つ観者を驚かせ、観者は疑う余地なく即座に自身の写し姿を見ざるをえなくなる。これは、見ている自分と左右あべこべに映し出された鏡の中の見られている自分という分離体験の対立である。「映り込みの中では誰しものがエイリアンになる」¹。このフォイルは水木のモンタージュでは窓のように、建築学的な意味における膜の効果を果たし、その半透明で半反射するという特徴により空間とも、また枠ともなる。多様な反射により、ダイナミックで複雑な、空間、時間そして観者という関係の網が生まれる。観者はシナリオの出演者となる。能動的であり、またそうあることを要求されている観者の存在によって初めて、水木の作品は完成する。観者はこのコンセプトになくてもならないものであり、作品の中にいることをすでに予定されている。過去と現代、今現在の区別と同様、写真と観者の空間的区別は無くなる。カタログにおける水木作品は、展示におけるそれと比べるといくらか違うように働く。鏡の前の変化する（全）身体と空間の映り込みは起きない。しかしながらカタログ写真を撮影したカメラマンも避けられず、遊戯的な喜びをもって撮られた展示空間の映り込みは真に超現実的経験的意義を持つ²。

日本人写真家はまた、自身の考察を映り込みという助けを借りて、次の二つの作品で異なった方法によ

り表現する。詩的な美しさを持つ巧みな構図により、《About process of dreaming #cars》の繰り返されるモチーフ（窮屈に駐車された車のフロント部）の効果は巧緻さを高めている。水木はモノクロの美学にすべての印象を統一し、最適に選択された縦長フォーマット上の反復する要素は視覚的段階をつくり、滑らかに光るボディー表面（ボンネットとフロントガラス）を仰ぎ見る。圧縮され、揺らめく反射物の輪郭線は抽象的な形の複合体のように煌めく。ボンネット上の反射物は、正確に見れば透明なフロントガラスを通してわずかに認識できる車内にある物のひとつとなる。

洗練された移行、透過する素材、モチーフの反復は白壁の角に飾られた作品《Corner works #Fitness》のコンセプトにも現れる。組みであると同時に互いに独立した同サイズ写真の接合部は、ここでも新たに水面上の映り込みについて考えさせ、写真に見えるトレーニングの動作の時間的空間的流れについての疑問を投げかける。ロールシャッハ＝テストのような主要モチーフが左右対称に見える一方で後景の木や建物のシルエットはそれぞれ同じ向きで繰り返されている。カメラマンはライン川沿いのどの地点に立っていたのだろうか。どのようにして窓ガラス上の巧妙な映り込みは静的モチーフの中に入ったのだろうか。

ヴァニタスの象徴としての鏡は過去を意識させ、水木作品においては、束の間の出現と消失、絶えざる侵入—外の他者として—とオーラと独自の世界を持った人の再退去との間でダイナミックな相互作用が生まれる。というのも、日本文化の根本的なテーマはウチに属するか、ソトに属するかということである。私の世界とあなたの世界。そして「自分の意志に関わらず、他人の鑑賞世界に踏み込んでしまう（＝映り込んでしまう）時、誰しもがひょっこり現れたエイリアン（異邦人）として他人の世界を干渉しているのだ」³。

人間は決して孤立してはおらず、常に社会的心理的背景の中で動いている。水木のモンタージュの前にあっては、正にその通りである。ダン・グラハムが考案した行来可能なガラス・パビリオンとも比較できるが、ある特別な方法で空間の社会的相互作用、そして近遠の許容限界、コミュニケーションの社会的機能という問題に取り組む。これらのモンタージュはアイデンティティ、コミュニケーション、そして共同体の分裂、若しくはそれらの可能性についての省察として理解できる。水木のフォト・モンタージュを前に、我々は時空間を旅し、今ここ、そして都市的精神的歴史的な空間にある取り返しのつかない一瞬という次元に対する意識を手に入れる。これぞ「flowing Urbanity」。

邦訳：小野恵子

1 アーティストの作品解説より。

2 白い車の屋根に「巨人」が座り（1）、話し込んでいる二人が自転車のハンドルに立ち、その一人が明らかに彼らの前にいる人の群れを指差し（2）、頭も上半身も欠けた二人の男の脚が救いようもなく水中に漂い（3）、小さすぎる玄関のうしろに隠れ、魔法にかけられたかのように、縦半分しか見えない人物（4）を読者は見るだろう。

3 アーティストの作品解説より。



Instability (silver shadow) #Cologne 1, 2013
mixed media, 102 x 152 x 5 cm



Instability (silver shadow) #Cologne 2, 2013
mixed media, 102 x 152 x 5 cm



Instability (silver shadow) #Cologne 3, 2013
mixed media, 102 x 152 x 5 cm



Instability (silver shadow) #Cologne 1, 2013
mixed media, 102 x 152 x 5 cm



Corner works #Fitness, 2013
Inkjet Print/Alu-Dibond, 48 x 64 cm



About process of dreaming #cars, 2013
Inkjet Print/Alu-Dibond, 60 x 40 cm